

刈田真緒

あなたはやわい石を埋める　朝日がとおい線路の下で
マール模様に淀んだそれに　そそげないでいる土の傍ら
だれもがそうしていたことに　ゆらゆら気づかないふりしてた
双眸を細くするたびに　あなたはすこし彫刻／になる

あなたはやわい石を埋める
それだけの色
ぱきぱき

ラップ音／に似た／振動がして、

それは一度や二度ではない

うねって、
細い糸

貼り詰めて

られて

<

.....

(刻まれる音はいやおうなしにすべてを加速させるもので、

「そういえばずっと前から鳴っていたのだとようやく気づいた！」

音がきこえるずっと前から

ゆりかごは細い糸で編まれた

たったいま 足元を覆っていった／だけ

音がき――えるずっと前には

しじまの石を愛でて――られた

それは灰色――うつくしさと

――おらかな系統でこ――していた・祈――

「抱きしめることしかできなかった、ってやばい、ね」

あなたはやわい石を埋める。いつも持ち歩いていたそれは、平面になり、踏まれる。からっぽのあなたにはもう、なにも入らなくなったけど、透けるほど白いこの糸は、歩行を楽しみにしてくれた！（と、わらった）